良田中道遺跡（1区）の発掘調査

縄文時代終わり頃の様子（南西から）

遺跡上空から湖山池を望む（南西から）

良田中道遺跡は、湖山池南岸に迫る丘陵に挟まれた谷筋に位置しています。調査区内からは古墳時代前期（約1,700年前）以降に何度も作り変えていた水路や水田のあぜの跡が見つかり、この頃から現在に至るまで水田の景観が広がっていたことが分かりました。

弥生時代にさかのぼると、景観は一変します。調査区の東端に大きな河川が蛇行しているのが見つかりました。その一部では、横にした板を縦に打ち込む板で固定した「護岸施設」となる木製構造物が確認できました。このほか、谷奥から流れてくる小さな河川が何本もできては埋まっていたことが分かりました。

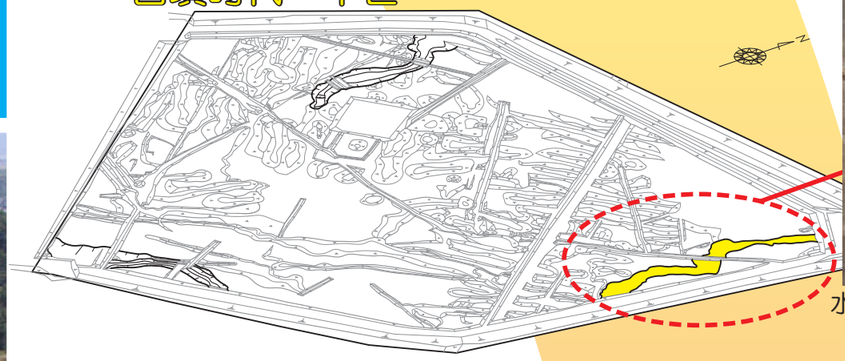
縄文時代にはさらに多くの河川が幾重にも蛇行しながら合流していた様子がうかがえました。この河川の中や河川の近くからは縄文時代後期（約4,500～3,500年前）の土器の破片が見つかっており、周辺で縄文人が活動していたことが分かりました。

発行：公益財団法人 鳥取県教育文化財団 調査室
〒680-1133　鳥取市源太12番地　（旧鳥取湖陵高校美和分校）
TEL：0857-51-7553　FAX：0857-51-7550
e-mail：tottori-kyobun@kyobun.sakuratan.com

発行年月日：平成25年11月2日

文化財保護強調週間
Cultural Properties Protection Week

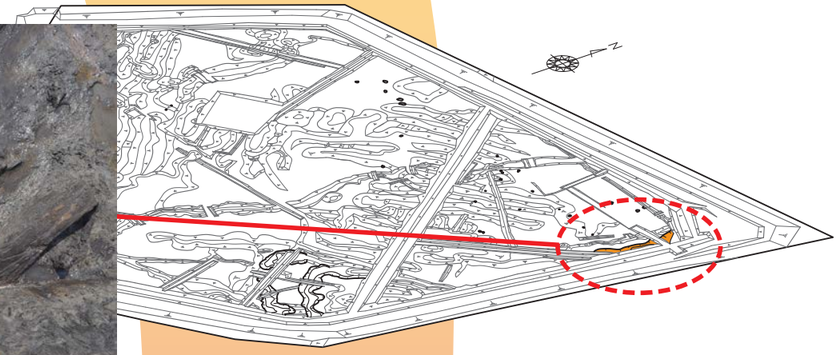
古墳時代～中世



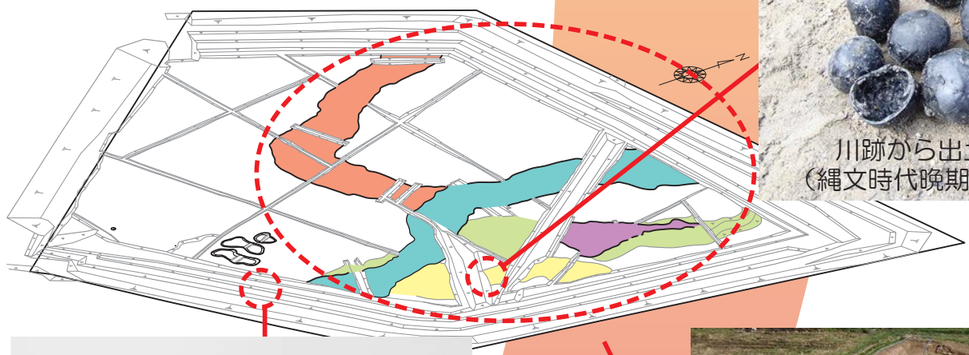
水田のあぜの痕跡（擬似畦畔）（南東から）
（古墳時代以降）

弥生時代

木製構造物（溝の護岸施設）（東から）
（弥生時代後期？：約1800年前）



縄文時代

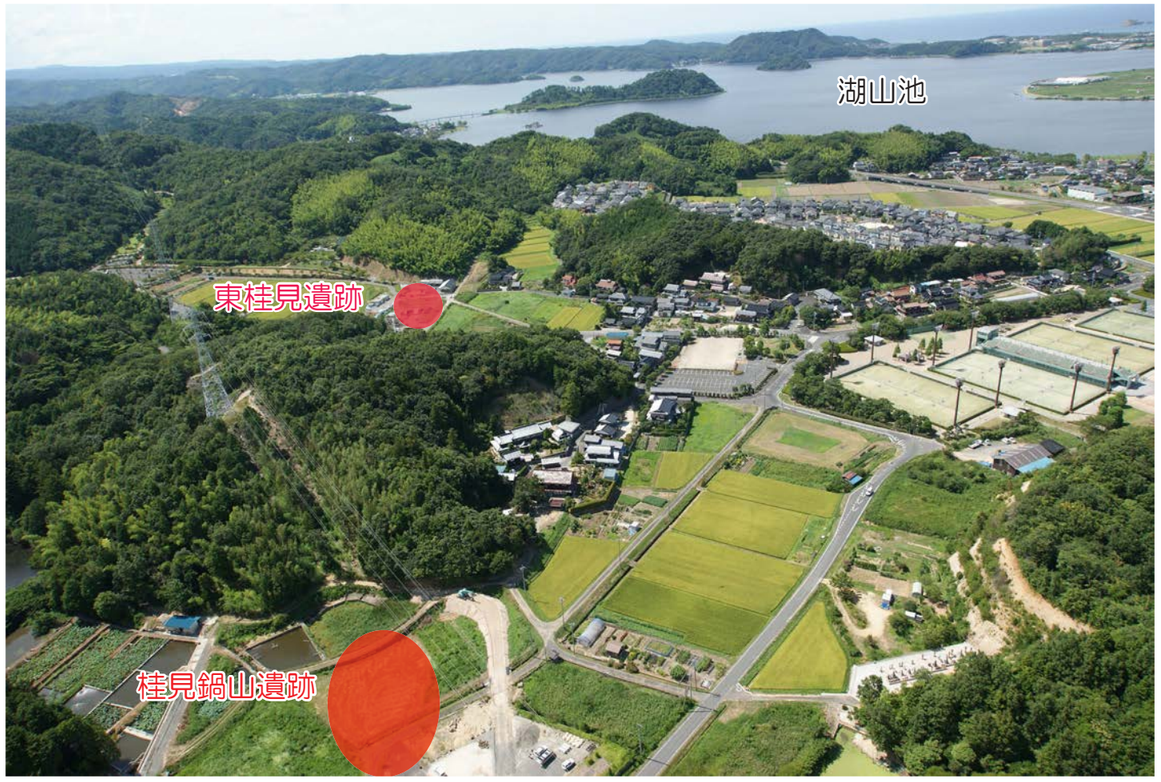


川跡から出土したトチノミ
（縄文時代晩期：約2800年前）

見つかった縄文土器
（縄文時代後期：約4500～3500年前）

蛇行しながら合流する川跡（南西から）
（縄文時代後期：約4500～3500年前）

桂見鍋山・東桂見遺跡の発掘調査



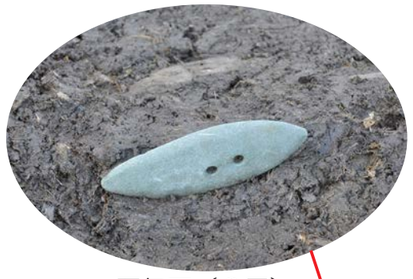
桂見鍋山遺跡および東桂見遺跡は、どちらも湖山池南岸に形成された小規模な谷の中にあり、桂見鍋山遺跡の西側にある低い丘陵を１つ越えた谷に東桂見遺跡が位置しています。

これまでに桂見地区で行った発掘調査により、約４ｍの厚さの地層の中に、5,000 年近くにわたる人々の生活の跡が埋もれていたことが分かりました。主に中・近世の水田、弥生時代後期後半から古墳時代前期頃（約 1,800 ～ 1,650 年前）の水田と竪穴住居跡、縄文時代前期末から晩期（約 5,000 ～ 2,800 年前）の土器が見つかっています。

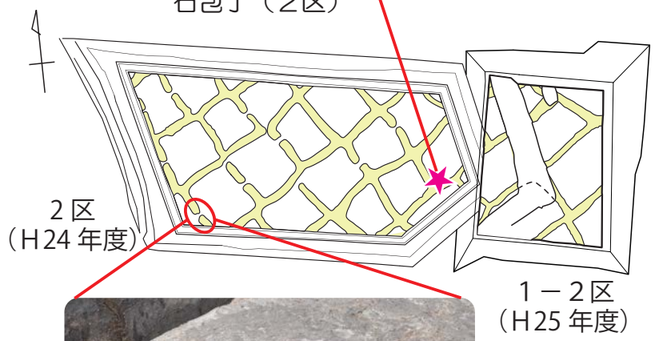
その中でも、古墳時代前期頃の水田は非常に良く残っていました。とりわけ桂見鍋山遺跡では板を使った水口の跡もはっきりと残っていました。また、水田付近の山際では人が生活していたようで、東桂見遺跡では竪穴住居跡が見つかりました。このため、この時代の桂見地区では、谷底平野で水田を営み、山際に家を建てて暮らすという、現在と同じような集落景観が広がっていたことが分かりました。なお、竪穴住居跡や溝の中からたくさんの土器が出土した他、水田からは弥生時代の石包丁等の農具が出土しました。

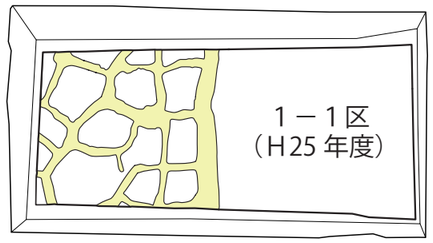
この他、東桂見遺跡では現在の地表面から約４ｍ掘り下げた地層で、あまり磨滅していない縄文時代前期末頃（約 5,000 年前）の土器がまとまって見つかりました。この近くに暮らしていた縄文人が捨てたのかもしれません。

桂見鍋山遺跡（古墳時代前期頃の水田）


石包丁（２区）

今年度検出した水田（１－１区）

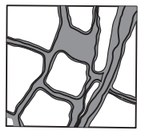




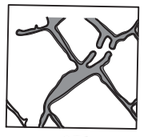
水の量を調整する水口（２区）

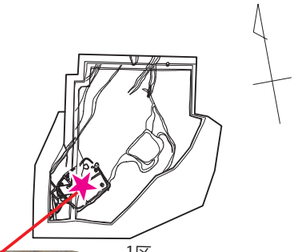
今年度検出した水田（１－２区）

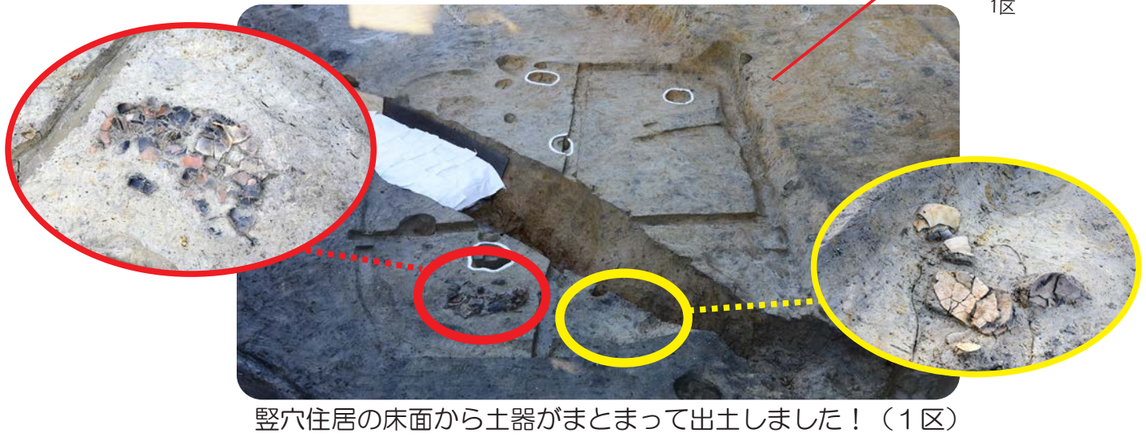
東桂見遺跡（古墳時代前期の竪穴住居跡）


4区

3区


2区


1区


竪穴住居の床面から土器がまとまって出土しました！（１区）